

第7回 外国語コンテスト

ドイツ語部門

2001年度の名古屋語学教育研究室主催第7回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2001年11月27日(火曜日)におこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回は、昨年度と趣向を変えて二つの歌を課題に選びました。参加者は、シューベルト作曲の有名なドイツ・リート『菩提樹(リンデンバウム)』と20世紀の初めに女優マレーネ・ディートリヒが歌って有名になった『リリー・マルレーン』のどちらかを選ぶことができるようにしました。

人前で歌を、しかも慣れないドイツ語で歌わなければならないということで参加者が集まるかどうか心配はしましたが、11名の参加者がありました。

その結果ですが、非常にレベルの高いコンテストになりました。採点は、発音・アクセント、そして表現力の合計点で行ないました。今回は、歌ということで表現力のところで差が見られましたが、外国語コンテストであるということを考慮して、まず発音とアクセントが正確であるかどうかを重視しました。

その結果、第1位(優勝)は『菩提樹』を完璧に歌ってくれました榎谷太一君(01J1312)、第2位は同じく『菩提樹』を歌った小島祐樹君(99J1455)、第3位は『リリー・マルレーン』を歌ってくれた木村友紀さん(00J1363)でした。残念ながら入賞できなかった他の参加者も、入賞者と比べて見劣りのない練習の成果を堂々と披露してくれました。これを機会にして、皆さんには、ただ授業のドイツ語を勉強するだけでなく、さまざまなドイツの歌にもぜひ親しんで欲しいものです。

最後に、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究

室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで今回もコンテストを続けることができました、心よりお礼申し上げます。

そして今後さらに質の高いコンテストを行なうために、課題の選び方から実施、審査の方法までまだまだ反省すべき点や改善すべき点は多いいうことをふかく自覚して、次回コンテストに備えたいと思います。

(島田 了)

フランス語部門

第7回フランス語コンクールは2001年11月26日行われ、19名の参加者があった。これまでと比較して平均的な人数である。その大多数は法学部、経営学部の2、3年生であった。

コンクールのテーマはギヨーム・アポリネールの詩『ミラボー橋』を読むこと、できうれば空で朗読することであった。難しいところは多くある。発音やプレゼンテーションに気を配ることの他に、リズムを強調し、詩句のメロディーを際立たせることである。なぜならこれは有名な詩であり、多くの歌手に歌われてもいるからである。

例年どおり、1回目2回目と審査を繰り返して優秀者を選抜していった。初回で7名を選んだが、これは容易であった。学生たちの知識程度が、概して、下位グループとの間ではっきりしていたからである。しかし、最終3名を選出するに当たっては、挑戦者間に大きな差異はなく、選考は困難であった。最終的には、立ち会ったフランス語教師3名の相談により、以下のとおり決定した。

第1位 肥田 晴司 (00M3304)

第2位 川北 陽 (00M3314)

第3位 浦川 博明 (00J1277)

本年度もまた、コンクールはよいコンディションと雰囲気のもとで行われたが、これは参加者全員にとっては喜ばしいことであった。

(ラッセン)

中国語部門

第7回外国語コンテスト「中国語部門」は2001年11月22日(木)午後1時から211教室において開催された。例年と同様「現代中国学部部門」と「法学部・経営学部部門」とに分けて実施した。

「現代中国学部部門」では、課題文の暗唱と自らが作文した中国語の文章を暗唱するという内容であった。正確な発音に努める一方、文章の内容をよく理解した上、感情をこめた発表が特徴であった。ただ、昨年と比べ、参加者の人数が少なかったことにさびしさを感じた。一方、「法学部・経営学部部門」では参加者が44名で活気にあふれた熱戦となった。とくに車道の法学部2部からは3名が参加し、しかもその中から第1位の栄冠を勝ち取った学生が現れたということは前例のないことであった。

今後は、教師側からの「過度の働きかけ」によって参加者を増加させるという方向ではなく、学生側からの積極的かつ自主的な参加が切に望まれる。

入賞者は以下の通りである。

「法学部・経営学部部門」(課題文の朗読)

- 第1位 01SJ1002 原田 大輔
- 第2位 00M3388 山田 真理子
- 第3位 01J1262 奥富 裕一郎

「現代中国学部部門」

- 第1位 00C8006 柴田 幸洋 (自由課題文)
 - 第2位 00C8017 大崎 綾子 (課題文の暗唱)
 - 第3位 00C8110 山下 怜子 (課題文の暗唱)
- (鄭 高咏)

韓国・朝鮮語部門

第7回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」の部、本選会は2001年11月22日(木)、名古屋校舎212教室で実施された。本選出場者は、車道校舎からの2名(山口彬・吉田誠両君)を加え、15名。ほぼ全員が、課題テキスト朗読の前後に短い韓国語による自己紹介や挨拶を行っていたのが印象的であった。

審査員の一人、陶山名誉教授が「総評」でも言われたように、上位者のレベルは高く、従って入賞者の選定には今回も頭を痛めたが、結局以下のごとく決定した。

- 第1位 00J1369 水谷 元昭
- 第2位 01M3376 宮代 和子
- 第3位 98J1327 久野 幹太

入賞なのがしたもの、吉田誠君(01SJ1098)、塚原雅也君(01J1286)、木村恵さん(00M3405)等と、入賞者との差はほとんどないと言ってもよかった。しかし、上位者だけが「関心の対象」というわけではない。毎回言うことだが、むしろ他の学生諸君が、熱心に練習してきて平素の実力をはるかに上回る発表をする時こそ、私達教育者は、「外国語コンテスト」の本来の意義を感じるものだ、ということも知っていて欲しい。

(常石希望)

日本語部門

日本語部門は2001年12月11日、例年のように、外国人留学生によるスピーチコンテストでした。1年生12名、2年生3名の合計15名が全員「留学生が見た日本」という大きなタイトルのもとの、それぞれ自分の身近でおきた小さな出来事から学び取ったことを語ってくれました。そういった小さな出来事は私達日本人には極当たり前のことになっており、ほとんど気にもしないで通り過ぎていくことばかりですが、留学生は敏感にそれら

を読みとり、そこから多くを学んでいる様子が伝わってきました。聞いている者には、異文化を体験するとはこういうことなのだと知らされた思いがするとともに、また、日本というのはこういった側面を持った社会なのかと、あらためて日本を客観的に見つめる良い機会となったと思います。

例年に比べて、今年はスピーチというより自分の体験談に終始したものが多く、その点は少し残念でした。しかし、そもそもスピーチをするのはなかなか大変なことです。それがましてや外国語となればなおさらですが、にもかかわらず、積極的に参加してくれた学生が多くいたことをとても嬉しく思っています。そんな中でも、しかし、入賞者たちのスピーチは主張もはっきりしており、日本の社会、文化を巧みに浮き彫りにしてみせてくれました。この後に記載される学生のスピーチを楽しんで下さい。

(山本雅子)

- 第1位 01C8217 李 成海
 第2位 01M3514 易 華
 第2位 01C8218 李 亜坤

《日本語コンテスト入賞作》(原文のまま)

第1位 日本語からみた日本人

現代中国学部1年 01C8217 李 成海

こんにちは、みなさん！ 私が日本に来て一番最初に学んだ日本語とはこのあいさつの言葉「こんにちは」でした。私の日本での留学生活、日本語勉強というものはこの一言のあいさつから始まりました。

朝学校に行くと「おはようございます」と明るくあいさつ、帰る時は「さよなら」と丁寧にあいさつします。バイト先に行くとまた「おはようございます」と元気よく仕事場の人たちに声を掛けます。バイトを終えて帰る時も「お疲れ様でした」

ときちんとあいさつします。「すみません」、「ごめんさい」、「ありがとうございます」などは一日中で何回言っているか自分でもよく分らないぐらいです。日本語勉強から始まった日本での留学生活、あいさつから始まる日本語の勉強、留学生の方なら多分みんなこういう経験があったと思います。私は「なぜ日本人はこんなにあいさつにこだわってるんだろう」と考えはじめました。

実は日本語だけでなく、英語とか韓国語、中国語などを学ぶことも決して甘いものではないと思います。『言語というものはただのコミュニケーションのための手段であるだけではなく、その民族の文化、あるいは価値観、世界観などに深くかかわっている』という文章をある本から読んだことがあります。その通り、一つの言語を通してはその民族の心理と性格の特徴を覗いて見ることができるのです。普通、日本人は礼儀正しいと言われていきます。きちんとしたあいさつをしているからそう考えられるでしょう。勿論、あいさつに対するこだわりも礼儀正しさを求める日本人の性格特徴の一つだと言えます。しかし、それだけではありません。日本人はあいさつを通して他人に対する自分の心配りを示しているのです。「がんばってねー」短くてもやさしい一言、「ありがとうございます」うれしいけれどそう答えるしかない自分。人と人の心が一言のあいさつによってうまくつながってくるのです。

あいさつのほかにもいろんな事から日本人の性格を覗いて見ることができます。私にはこんな小さな発見がありました。日本人は「ヨイショ」という言葉をよく口にします。朝、ヨイショと言って床から起きあがって、ヨイショと言って伸びをします。顔をごしごし洗ってからヨイショ、出掛ける前もちろんヨイショ。面白いことです。これは日本人独自の少なくとも中国人とか韓国人にはない口くせです。これはなぜでしょう。私は「ヨイショ」というのはある事に対する訣別だと考えます。新しいことを始めようとすれば必ず一旦立ち止まって古い事と訣別しながら新しい事に立ち向かう。そして、自分に新しい事に立ち向かう力、

つまり気合いを入れる。これも日本人独自の性格ではないでしょうか。

このように他人に対する心配りを伝えることも、自分に気合い入れることも言葉を通じて表現できるのです。我々在日留学生にとっても日本語の勉強を通じて日本の文化、習慣、日本人の性格などをもっと深く理解し、言葉のコミュニケーションに基づいて、心と心のコミュニケーションを求めることが留学生活のためにも、自分自身のためにもいいことになるのではないのでしょうか。

コミュニケーションというものは決して一方的なものではありません。だから、来年は日本人学生の方からも「中国語を通して見た中国人」のようなスピーチを発表して欲しいです。日本人が礼儀にこだわっているように中国でも礼儀というものは大切なものであります。いつか中国に行って実際に体験してみなさい。その時、中国の人々たちは千五百年前から伝わって来たあいさつ言葉で歓迎するはずですよ。

それとは「有明自远方来，不亦乐乎」

第2位 日本 の 女性

経営学部1年 01M3514 易 華

皆さん、今日は。私は経営学部一年生易華と申します。今日は日本の女性というタイトルで話したいと思います。私は話をする前に皆さんに質問したいことがあります。皆さんは幸せのにシンボルとしてどんな image を思い浮かべますか？ ダイヤモンドをつけている rolex を手にはめて人目の中で自分を誇ることでですか？ それともベンツか BMW に乗って都会から自然の中をゆったりドライブ事ですか？ そういうことも幸せかもしれません。でも私の心に一番ぴったりする幸せな姿はアメリカのグリーンカードを持って、ヨーロッパの大きなハウスに住んで、中国の美味しい料理を食べていること。でもそれが幸せに完成するためには日本人の奥さんのような役割を果たす女性が

そこにいなければなりません。日本人の女性は美しく、優しく、礼儀が正しく、家庭に尽くすことで世界中の男性が憧れています。私はそんなことが本当にあるだろうかと言う不思議な気持ちを抱えながら、日本に留学してきました。

戦後日本経済は大きく発展してきました。短時間で豊かな国になりました。このように発展した要因としてはいくつかの言い方があります。アメリカからの援助とか、自分の国では戦争がなく、周辺の国の戦争で経済が刺激される機会があったとか、日本の農村の人が大都会に出て安い賃金でも一生懸命働いて競争力を支えたこととかあげられているのを聞き、そうかもしれませんと思いました。でも日本人の女性の役割に触れた話はほとんど聞きません。日本の女性について、私が中国にいた時に聞いたことと私が日本に来て実感したことと大変な違いがあると思います。みなさん、ちょっと考えてください。日本の女性は普通は小学校の五年生頃に、裁縫や料理など身近な生活の技能や知恵など身につけ始めます。学校を卒業して就職しても結婚したら、仕事をやめて、専業主婦になる人が多いようです。男は仕事、女は家庭という役割分担でその生涯を一貫しています。奥さんは主人が起きる前に朝食を作っておきます。昼には家事、育児などをします。主人が帰る前に晩御飯を用意してお風呂を沸かしておきます。このようにして外で働くものが十分力を発揮することが出来、子供のしつけや教育に対しても日常的に行き届いた心配が行われています。家庭全体の大切なバランス維持させることになりそのことが日本人の生活を守り、日本が豊かな国になったのを陰で支えたのは奥さん達でもあると言えるでしょう。奥さん達がモノを生産していないということで、そういう奥さん達の役割を小さく評価していいのでしょうか？

このような伝統的な女性の生き方に変化が出てきたようです。女性も世間知らずではいけない。もっと社会に進出するべきだという声が高くなりました。日本女性の生き方が変化を生じたのは歴史的な必然のようなものがあつたかもしれません。

これから、時代が発展するに伴い、日本の女性の社会的地位が高くなり、優れた指導力を発揮する人も多くなるでしょう。しかし、日本の伝統的な奥さんたちが果たしてきた役割がただ世界中の男性が憧れるというよりも遙かに重要な意味があるのではないのでしょうか。

私は日本で勉強する一人の外国人女性として、その精神が将来の人々の幸福を作る力をよく考えてみたいと思います。

最後に言いたいことがあります。それは21世紀は女性が人間として生きる時代だと思います。

以上

第2位 日本のホームレス

現代中国学部1年 01C8218 李 亜 坤

何処の国でも自分たちの独特な生活習慣があります。同じ国でも地方や民族によって生活習慣が違います。

たぶん、今ここに居る皆さんにとっても日本へ留学に来る前、自分の頭の中には、日本に対していろいろなイメージがあったと思います。

でも、日本に来てから、自分自身本当に日本の社会の中で体験した時、最初の頃自分が思った日本と全然違っていたり、或いは不思議に感じるところもいっぱいあったと思います。私も日本に対して、色々な驚いた事がありました。中でも一番驚いたのはホームレスの事です。

日本は世界でも有数の経済、文化や交通が発達している国です。人々の生活水準もとても高い国だと思います。このような先進国であるにもかかわらず、ホームレスというような人が存在しています。しかも、公園に行ったら、あっちこっちにいます。日本人の友達の話によると、ここ数年ホームレスが急激に増えているそうです。

最初日本に来た頃、テレビをつけたら、ただ人を殺してみたいというような少年による殺人事件や会社の倒産或いはリストラで自殺する事件など

いろいろな事件を放映していました。どうしてこの国では精神的に弱い人、考えることが変わって人が多いのだろうと思ってとても怖かったです。それで、ホームレスのような人を見たら、大回りしてホームレスの前を通らないようにしていました。ホームレスの人は何を考えているかよく分からなくて、見るたびに怖がっていました。

しかし、ホームレスってどんな人なんでしょうか？ そのような呼び名の人がいるわけではありません。ある人が置かれた状態を示すに過ぎません。辞書を引いてみたら、住む家のない路上生活者と書いてありました。路上生活者って文字通りに路上だけで生活しているわけではないと思います。当たり前のことですが、誰でも、生まれながらにして路上生活をしていた人はいるはずがありません。結果的に路上生活に至るまで、必ずそれぞれの生活の歴史があると思います。私はとてもその原因を知りたくて、インターネットを通じていろいろ調べました。インターネットを開いてみたら、いろいろ書いてあります。たとえば、親子や夫婦関係をめぐるトラブルによって起こった家庭崩壊により家族と離れて関係を取り戻さきっかけをつかめないままになってしまった人、または出稼ぎで大都市に着いたが、不況などの原因で職を失い、そのまま家族と会えなくなってしまった人、競争社会から脱落し、社会的なストレスを抱えた人、またそれらを背景としたアルコール、ギャンブル依存症など、目には見えにくいけれど具体的な生活困難を抱えてしまった人など、いろいろあります。しかも、ホームレスの中には、中小企業の元社長もいれば、元教師や修行僧もいます。いろいろな人がいます。

私の家の近くにも公園があります。そこにもたくさんホームレスが住んでいます。このように彼らがホームレスになった原因をいろいろ知ってから、前ほど怖くなくなりました。今は普通にホームレスの前を通ることができるようになりました。それだけでなく、以前より心の距離が近くなり、ホームレスの人が現実の社会に対して、あきらめずに元気で生きて行ってほしいと思うようにまで

なりました。

人間は生きている間、社会と関係なく、誰もがずっと自分の思った通りに生きていけるわけではありません。ホームレスの人はもちろん人によって様々な大変な経験や過去があると思うけれど、生活にあきらめてホームレスになるのは、ちょっと弱すぎるんじゃないかなと思います。人生はどんな困難なことが起こっても、最後まで前向きに頑張るべきだと思います。

ホームレスになった人たちの弱い心を考えたら、つい私たち留学生のことも頭に浮かんできました。私たち留学生もふるさとを離れて、外国で留学しているうちに、みんな言葉で言えないぐらい沢山の困難なことを抱えていると思います。それでも、みんな自分たちの夢をかなえるために、いろんな困難と戦って、あきらめずに前向きに頑張っているではありませんか。

留学生活は私にとっても、みんなにとっても、本当に人生の中でとても貴重な体験だと思います。ですから、これからもこの貴重な体験を無駄にしないで、どんな時でも、挫けずに素晴らしい未来に向かって挑戦する気持ちを持ち続けて行きたいと思います。

最後に、私が愛知大学に入学して、皆さんと知り合いに慣れたのも、何かの縁だと思います。この縁を大事にして、お互いに助け合い励ましあって頑張っていきたいと思います！

'02公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学談話会

〈後期〉 名古屋校舎研究館第3会議室

〈時間〉 14:30~16:30

⑥9月21日(土)

「EUにおける言語教育政策—ポーランドの外国語教育の現状—」

平尾 節子(法学部教授)

⑦10月12日(土)

「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語・韓国語を通して見たフランス語(その2)」

田川 光照(経営学部教授)

⑧11月9日(土)

「メディア用語の変遷と最近の特徴」

大西 五郎(法学部教授)

⑨12月7日(土)

「トーマス・マンとはいったい何者だったのか」

島田 了(経営学部助教授)

⑩2003年1月11日(土) = 2 講義開催 =

「漢字について」

矢田 博士(経営学部助教授)

「漢字文化圏における表音文字の背景(その2)」

陶山 信男(愛知大学名誉教授)

〈編集後記〉

'02年7月号をお届けします。

次号より、内容のより一層の充実を目指して、各語系の先生方に、この半年あるいは1年間に外国の新聞などに掲載された言語・文化に関するニュースなどを提供していただくことになりました。お楽しみに!!